

低山はいかい「井の頭公園入門編」報告

今回は定員が絞られていた為、希望しても参加が叶わなかった方々の為に少し詳しく記述します。

1. 井の頭公園へ

名作ドラマ「俺たちの旅」舞台・井の頭公園駅は、往時の面影を留めていなかったが、青春の心を宿したままの参加者は朱夏の暑さにもめげず集結、秋楡や榛の木の溪畔林を眺めつつ江戸最初の上水・神田川の始まり「水門橋」へ向かう。水門の上の御影石は弁財天の石鳥居だったと伺い、今も鳥居を潜り清められている水に感謝し手を合わす。

2. ひょうたん池

双六会の新年観察会で狭いひょうたん池の橋の上で停滞が生じ、「通路を塞がないこと」と、ご指導を受けた記憶が蘇り、速やかに進もうとすると、「こういう所を見逃さないように…」との呼び掛けあり。橋の側石が木の根により持ち上げられ強か歪んでいた。太い赤味の根を辿れば、どうやらメタセコイアが水と酸素を求めて龍の如くのたうった結果のように思われた。ひょうたん池には、外来種のコカナダモが繁茂しており、駆除に苦労している反面、水質を改善している節もあるのだと伺う。確かに水は澄み酸素の泡が湧き立っていた。

3. 弁財天へ

旧表参道「黒門」への道は、筆者も新年観察会でご案内のコースで懐かしい。弁財天へ下る石段の上の「紫灯笼」には、江戸紫（武蔵野産のムラサキと井の頭の水質で染め出された京紫にも負けない紫色）で財を成した人々の名が連なる。冒頭述べた水門の上の御影石は、この石段上にあり、明治の神仏分離令で撤去された石鳥居の上部だったもので、今は標石のみ残されている。標石の上に嘗て鎮座していた「宇賀神」と鳥居前の「狛犬一対」は、弁財天の境内に移されているが、焼失後に再建された本堂に比べ古色が浮かび、歩んできた歴史の差が一目瞭然である。

弁財天「太鼓橋」手前の石灯笼には「日本橋」の伊勢屋（鯉節で有名な「にんべん」屋号）等の名が（4名のみ寄進で）大きく刻まれているので、老眼でも確認しやすい。その他、水盤や橋桁、石灯笼などに年代・寄進者・地名等が読み取れ、江戸の町を潤す神田川の源流・弁財天への信仰の深さ、小金井桜に連なる行楽地としての賑わいを偲ぶことができる。

4. 水生物園へ

水生物園のある中の島に掛かる「七井橋」は、湧壺が七つあったことに、「狛江橋」は渡来人が農耕に用いたこの池を「狛江」と呼んだことによる。また、徳川家光が訪れた時、池の名「なないの池」を「名無いの池」と聞き、「名が無いなら“井の頭”と名付けよう」と傍に生えていた辛夷の木に手ずから「井の頭」と彫ったのが井の頭の名の由来と言う。この辛夷の木は既に枯れて石碑が残るのみ。但し「御切付」の部分は

大盛寺に宝物として大切に保存されていたが、1924年(大正13年)の火災で焼失。家光がお茶を点てたという「お茶の水」の井戸は、当時その辛夷の木から北へ回った池辺にあったものを、大正6年の恩賜公園開設時、現在の位置に設計設置された。

◆ 落葉性ヒノキ科四種との出会い

分園に入る前、井の頭の植物を管理されている幹事ならではの手腕により、落葉性ヒノキ科の下記4種の枝の実物を並べ見比べるという機会を得た。

- ・ラクウショウ(落羽松/別名ヌマスギ、ラクウショウ属 北米原産、葉も枝も互生)
- ・ポンドサイプレス(立落羽松、中国原産、落羽松の変種、螺旋状の葉は水松似)
- ・スイショウ(水松/別名ミズマツ、スイショウ属 北米原産、螺旋状葉色がやや淡い)
- ・メタセコイア(曙杉、メタセコイア属 中国産、葉も枝も対生、枝・樹皮に赤味)

「これを見られただけでも参加した価値がある！」との声がしきり。一同興味津々、実や葉を触り匂いを嗅ぎ、熱心な観察と質問が続いた。「ポンドサイプレスの和名はなぜ沼杉ではないのか？」という筆者の疑問は、未だモヤモヤしているが、先にそう決まったものは変えられず、覚えるしかないものと思う。

猛暑を凌ぐため、一旦、冷房の効いた「水生物園」で休憩。カイツブリが小魚を捕る様子や、淡水に棲む様々な生物、かい掘りで復活したイノカシラフラスコモなどを観察しつつも、座り込むメンバーが徐々に増え、壁の花がズラリ…。漸くクールダウンして御殿山を越え、道路向こう井の頭自然文化園「こもれび広場」で、僅かな木漏れ日も避けながら涼をとっての昼食休憩。

5. 昼食後

食後、大先輩が魅力的な「宇治金時」を購入されたのを真似、カロリー少なめ？の「クリームソーダ」を入手。紙コップなので「ソーダ水の中を通り過ぎる風景」は見られなかったけれど、気持は少女時代に戻って女子4名のトークは弾んだ。カモシカの赤ちゃんや象の花子舎などを見学後は、いよいよ幹事の思いの籠もる「井の頭の木々」の変遷について…。

6. 井の頭の樹木の変遷

江戸時代初期、一体は茅原で將軍の鷹狩り場、その休憩所が「御殿山」の地名。「井の頭御林(天領)」となり、神田上水の水源地、御用材の供給源として樹林地に。江戸末期に小氷河期が終わり、水源地ブナの更新に影響が出る。御林改めにより、松、栗、檜、他の成木4千、苗木1万1千本が植えられる。

明治政府の官林となるも売却、用材伐採により湧水が枯渇。東京府が買い戻し、小檜、榎を植栽、更

に「御料地」に編入され、池畔は杉植林となる。終戦後、杉は建材として伐採され、現在、落雷？によって損傷し良材にならなかった為か、一本のみ歴史の生き証人として池畔に残っている。

明治 38 年、件の洪沢栄一により井の頭学校が開設され、庭木としてホオノキやカイノキ(学問の木)が植えられ、今も残っている。残された理由は不明だが、やはり真っ直ぐな良材とならなかった為かもしれない。その朴の木は、「やまおやじ」のように幹回りは太く、上は後発の枝が何本も育っているが、小櫓のように株際での更新ではなく、見上げる程高い位置で分かれている。これは、朴の木には小櫓程の強い萌芽力がなく、土台としてそれだけの高さが必要で、根の役割をも担っていたのではないかとのこと。

このように通常の萌芽更新よりも比較的高い位置で更新される場合「頭木更新」とも呼ばれるそうだが、この朴の木が人為的に頭木更新されたのか、落雷等で自然にそうなったのかはつきりとは分らない。その神性をも帯びた姿に来し方の想像が膨らむ。(幹事註:頭木更新は用材取得目的に広く行なわれていたので、落雷の偶然性よりも信憑性があります。)

御殿山辺りは伐採後に風散布種子が入り込み、大正 6 年の井の頭恩賜公園開園の頃には、「アカマツ、ソロ(シデ類)の目立つ森」となっていたことが記録に残っており、「ソロ」は「僧呂」、「ケヤキ」は「槻」と記されていたとのこと。(渡辺一夫氏の記述より)

見処となる木は、異形の朴の木、楷の木の他、ソロ(犬四手、赤四手)の目立つ森、燃料用の松脂採取跡がハート型に残る赤松、開けた場所で伸び伸び育った櫓、樹齢 200 年の平地の樺(自生かどうか)、ヒトツバダコ、ハナノキ、節毎に色が違って市松模様に見える金名竹等々、目の付け所で解説の種はみつかるものなのだと思う。

7. リスの小径から彫刻館へ

「リスの小径」では、枝にもたれ暑さにだらりと伸びきったリスの姿に己が身を重ね、冷房の効いた、北村西望の作品を展示する彫刻館へ避難。住まないという約束でここに建てられたアトリエに結局住んでしまい、お詫びに作品群を寄付したのだそうで、躍動感溢れる素晴らしい作品、特に長崎の「平和祈念像」は、階段を上がると優しく微笑む顔の表情まで間近で見て取れて感動も一入。A 館、B 館に続くアトリエには空調が無いが、高い天井まで聳える作品、作者の息づかいが残る空間、手にした工具などは、是非とも見逃さないで欲しい。

その近く、木々に囲まれた空間に「しゃぼん玉」「赤とんぼ」を作詞した野口雨情(吉祥寺に 20 年程在住)の書斎を移築した品の良い「童心居」が静かに佇んでいた。こちらもまた再度じっくりと訪れてみたい。杉林、公園入口の石碑、井の頭学校などは、その当時の貴重な写真と共に紹介していただき、一気に脳内タイムスリップが出来、イメージを描きやすかった。

8. 終章: 懐かしい人達との出会い・感謝の思い

この日は、安田さんを最初に井の頭に案内されたという石井さん、新年観察会で井の頭を案内した私、その時の班のメンバーだった田口さん、横井さん(ご親戚が公園駅前の酒屋さん、配達バイトでこの辺りを自転車で回っていた)、他班で副班長だった入江さん、コロナ禍で殆ど会うことが出来なかった新しい代の方々など、思いがけずご縁に導かれた巾広い年度の方々が集まり、楽しく語らえるのも「低山はいかい」の素晴らしさだと思う。

ふりかえりでも「井の頭自然文化園は、本来、動物園と植物園の融合施設であり、今後もっとこの地に相応しい樹木も取り入れて植物園も充実させていきたい」とのお話に深く賛同しつつ、国産ホップ「そらち」使用の生ビールで喉を潤し、深き学びの日を締めくくった。

安田さん、猛暑の中、様々なご配慮を頂きながらのご案内、ありがとうございました。入門編に続く、次の機会を楽しみにお待ちしております。

幹事註: 参考書籍 「公園・神社の樹木」